

---

# マジックパンプキン

happycome

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジックパンプキン

### 【Nコード】

N3657F

### 【作者名】

happycome

### 【あらすじ】

ある年の10月30日、ハロウィン前日。いつも仲良し6人組がハロウィンの準備をしようと仮装セットを買いに行く。そこから物語は始まった……この話は現在休載しています。

## 第一話：ハロウィン前日

ある年、10月30日、ハロウィン前日。午後3時ごろ

「よし！みんなで仮装セットを買いにいくぞー！」

この日を一番楽しみにしていた少女、桜魔魅。さくらまみ

一応中3なのにハロウィンなんてしていいのだろうか……………

（汗）

「ハロウィンって、カボチャとかかぶつたりするやつ？ わぁ！楽しそう！！」

目をキラキラ輝かせながら話すのが、川本祈。かわもとのり  
超がつく天然だ。

「えー、だりいんだけど。お前から買ってきて。」

と少し小さめな声になりながら話すめんどくさがりやの少年、遠藤えんどう狂助。きやうすけ

一度はまるとことんやるが、それまでが問題だ。

「まあ、みんなで買いに行きましょうよ。そして仮装で鬼ごつことか……………」

イキナリ何を言い出すのやら。ホントに何を考えているかわからない霊道辰則。れいどうたつのり

一族の血で靈感がある。そしてサディスト……………

「おお！いいじゃん！！ 仮装鬼ごっこ！！ 爆走しちゃうよお！？」

常テンションMAXの爆走少女、南雛子。みなみひなこ

学年一の足の速さで、鬼ごっこの勝率95%！ 残りの5%は罠に引っかけた。

「うおおおおー！！ やるぜえ！ハロウィン！！ 仮装鬼ごっこ！  
」

とやる気満々な熱血少年、かたやまもる片山守。  
熱血話を始めると1時間止まらない……………。

「よし！多数決の結果5対1でみんなで行く！！じゃあレッツゴ！  
」

と言いながら魔魅は歩いていく。  
祈、辰則、雛子、守は魔魅の後ろについていった。  
残る狂助は…………

「めんどくせえなあ…………ちつ、いくか……………」  
みんなの後ろについていった。

（街中）

「なんかいい感じのおもちや屋さんないのかなあ……………」  
ぽーっと見渡しながら魔魅は言った。

「あっちのほうはどうですか？ 不思議な感じがするのですが……………」  
……………」

少しニヤける辰則。

そこで雛子が

「お前の不思議な感じはどうせオカルト系の「いいと思うよー！  
行こう！！ 楽しそうだし！」  
」

祈の声は雛子の声を完璧にかき消して聞こえた。

「うおおりやあー!! じゃあいくぜえ!!」

と守は叫び、ダツシュ。

「恐るべし天然……………。けどダツシュじゃ負けないよお!!」

「

少しシヨツクな顔をしていたが、気を取り直してダツシュ。

「ちよつ……………。ちよつと待つてよー!!」

魔魅は悲しみながらダツシュ。その後ろに祈がダツシュ。

残り二人は……………。

「俺らもダツシュするべき……………なのか？」

と狂助は脱力の声。

「そうですね……………。残念ですけど走りますよ？」

辰則の声には少し不安の表情。

そして二人もダツシュしていった。

「静かな商店街」

商店街なのだがほとんどが閉店していて、つぶれていた。

「辰則さあゝん。どこに不思議な感じの店があるんですかあ??」

キラキラ輝く目で祈は辰則を見つめる。

辰則は目線を逸らし、そして言う。

「この奥にあるのですが……………すごい不思議な感じがします。危険なのか安全なのかわかりません。霊がいるかもしれせん。それでも行ってみますか…………？」

真面目に言った辰則の声は説得力があり、少し恐怖を感じた。

「行ってみよう。たとえ危険でもこの6人なら  
きつと乗り切れる。きつと！」

魔魅の声はわからない程度に少し震えていた。

8秒間の沈黙の後……

「……行こうぜ。悩んでたつてしょうがねえ。危険なら  
その場ですぐ自慢の足で逃げればいいじゃねえか。な？ そうだ  
ろ？」

意外にも狂助が言った。その一言で空気が軽くなり、

「よし。決まりだな！ いくぜおめえらあ！！」

変なところで熱血な守を先頭にその店に向かっていった。

「ここです。ここが不思議な店です。」

見た感じがボロボロ。本当にこんな状態で店ができるのか心配なく  
らい。

けど、明かりはついていて。看板には、こうかいてあった。

「玩具屋「ドリームナイト」」

「よし、入ってみよう。いくよ？」

今度は魔魅を先頭にして店の中に入った。

「ようこそ、いらっしやい。よくこんなところ見つけれられたのお。」  
70代後半ぐらいのおじいさんが出てきた。  
辰則はこの瞬間、何か違和感を感じた。

## 第一話：ハロウィン前日（後書き）

どうでしたか？評価・感想まってます！

次回は店の中で6人の運命が変わる出来事が・・・

更新は遅れるかもしれませんが；

## 第二話：不思議な玩具屋

「ようこそ、いらっしやい。よくこんなところを見つけられたのお。」

70代後半のおじいさんが出てきた。

顔はしわしわで目が微妙に見えるぐらい。

そんな弱弱しい目で6人を見つめていた。

辰則はこの瞬間、違和感を感じた。

「おじやましあゝす・・・」

魔魅は言いながら周りを見回している。

並んでいるのは今時売ってなさそうな玩具ばかり。

「この時期にくるってことはハロウィンの仮装じゃろう？はいはい、そこで待っておれ。」

おじいさんは店の奥に探しに行った。

「この店・・・やばいです。いろんな意味でやばいです・・・」

辰則が少しビクビクしている。相当怖いのだろう。

「なんでそんなにびびってんだ？普通の玩具屋じゃないか。気合だ気合い！」

守は言った。そして辰則は恐る恐る口を開いた。

「ここにあるすべての玩具・・・全部霊力のようなものが宿ってるんです。」

けど霊力ではない・・・けどとても不思議な力が・・・

みんなびっくりした。本当にそんなことがあるとは誰も思わない。

「どうしたんじゃ？ほれ！仮装セットもってきたぞ。」



おじいさんがかごにいろいろ衣装を入れて持ってきた。

「きみにはこれをやろう。すてきじゃろう?」

魔魅は魔女の帽子らしき帽子をもらった。

真つ黒でツバ付きの三角帽子。先端部分は後ろに折れており、先端には大きい星が付いている。

まきの帯は赤色で、ほんとうに魔女の帽子のようだ。

「そして次、君にはこれがいいじゃろう。信教などとは関係ないぞ?」  
祈がもらったのは聖なる十字架。

本当に神から授かったような神々しい物だが、真ん中にお化けの力ボチャの目と口が付いている。やはりハロウィンの道具だから遊びな部分があるようだ。

「そして君にはこれをあげよう。カッコイイ双剣じゃ。」

狂助は銃刀法違反で捕まるかもしれないほど本物に近い剣をもらった。けど刃ではない。

握りの部分は真つ黒だが、さりげなくカボチャの顔が。

「君には・・・やはりこれじゃろう。君の血に反応してくれるはずじゃ。」

辰則は真つ黒な勾玉をもらった。かなりビッグサイズで、殴られると痛そう。

穴がカボチャの目になっていて、見事なデザインに仕上がっている。そこで辰則はふと思う。

（なぜこのおじいさん・・・僕の血を知ってるんだ?!）

「君にはこれじゃ。元気な君にお似合いじゃろう。」  
雛子がもらったのは・・・

「えー！カボチャの被り物ー？！+ みたいなの・・・」  
ちなみに とはカボチャの頭についている緑の三角帽子である。  
ちゃんと口と目の部分は穴が開いている。結構可愛い感じだ。

「最後に君には・・・これじゃ。カッコイイじゃろう？」  
守は首飾りをもらった。

ダイヤの形で真ん中に十字架が書いてある。そして左右に翼がほどこされている。

聖騎士が身に着けているような首飾りだ。

「あの・・・えっと・・・代金は・・・？」

魔魅はずっと心配していた。実はお金はみんな自己負担なのである。

「ほ？代金はいらん。全部、無料<sup>タダ</sup>であげよう。」

「わーい！ありがとうございます！おじいさまあ。」

祈はすぐさま答えた。天然パワー炸裂。

「これでお前さんたちの運命は変わった。

その衣装はみんなで交換してはいけないんじゃ。

交換してしまうと、不幸が付いてくるそうじゃよ。」

おじいさんは高らかに言った。

「このまま着ろということだな。たしかにそれならめんどくない。」

狂助は少し安心して言った。

「ちなみに皆で明日同時に身に付ける。それが鉄則じゃ。」

「・・・はい・・・」

女性3人組は答えた。辰則は黙ったままで、守はずっと首飾りを見つめている。

「さて、もうこんな時間じゃ。帰らないと怒られるんじゃないのか？」

時計の針は7時を指していた。

「・・・やばい！」「・・・」

「おじいさんありがとうございました！」  
魔魅がお礼を言い、6人同時に走り出した。

「さて、これからが楽しみじゃな。あの子らに、あそこの運命を託した。」

あ、そろそろ準備しないとやばいな。」

30歳せいねんぐらいの青年が呟いた。

顔もキリツとしていて、モテ顔間違いなしの顔。

おじいさんがいた場所に、その青年は立っていた。

おじいさんは、もういない。

「じゃあみんな！明日放課後！！いつもの場所に集合！！」

自分の衣装を持って！あとお菓子・マネーも！！じゃあ解散！！

！」

魔魅が急いで言って、みんな家に帰っていった。

そして・・・10月31日。

## 第二話：不思議な玩具屋（後書き）

### 用語解説

まき：帽子の帯の部分。

握り：剣の持つところ。

カボチャの顔：（・w・）

### 第三話：Halloween！

ある年の10月31日。ハロウィン当日。

「みんな集まったー?!?!」

魔魅が言った。テンションはMAXに近い。

「集まってますよぉ〜。衣装も持ってますよぉ?」

祈もテンションUPなようだ。

「うぉおぉおりやぁぁぁ!!やるぜやるぜハロオオオウウイイン!!!!」

もう既に変人になつた守が言った。

「同時につけるんだよね??みんなセットしよーー!!」

案外雛子がテンション低いのは、他の二人のせい。

そのほかの二人は、

「……………」

無言。

「さてさて、もうみんなもらつた衣装はセットできましたか?」  
魔魅はノリノリ声で言った。

「できましたよ?っていつても僕は持つだけみたいですが……………」

辰則は少し不安そう…………。

「もう…………何が起きても知りませんよ…………?」  
とさりげなくつぶやいた。

「もういい。めんどくせえ。はやくやろうぜ……………」

狂助はやたら面倒くさそうだ。

「でわみなさんいきますよ……………」

祈が顔で「セットの用意しろっ」と目配せして

「セーのっつ！！！！！！」

0.01秒も狂わず、6人は同時に着た。  
すると、あたりが真ッ黒になった。

「えっ・・・ここどこ？真っ暗！！」

魔魅が最初の一声を出した。

「気合だ気合だー！！にしてもこの首飾りチョーカッコイイ！俺様最強！！」

と守はナルシストになっていた。

「おい！辰則なんかわかるか？」

雛子は少し混乱しながらも言った。

「なんか不思議なところですね。

けどここ・・・」

となにか言いかけたところで言うのをやめた。

「けどここ・・・がなんなんですかあ？辰則さん？

けどここ・・・楽しそうですね！とかですかあ？？」

ひとり空気読めてない祈。

「で・・・本当にここどこなんだよ・・・」

狂助が一番心配していた・・・。

そんな時、急に明るくなりあたりが真っ白になった。

「みなさ～ん！魔界へようこそ！！！」

結構子供な声が聞こえてきた。

6人は同時に声の主を確かめようと振り向くと

身長130cmぐらいの男の子二人が立っていた。

キラキラ輝く顔。夢と希望に満ち溢れた目。

二人はそんなそっくりな顔と目で見つめてきた。

「僕たち、みなさんを魔界「キイステイナ」に送る仕事を任せました。」

「インフレです！」「デフレです！」

「僕たち双子なんでどっちがどっかわからなくなると思いますが

よろしくお願いしま～す！」

とかわいらしい双子は言った。

「「「「「魔界、キイステイナ！！？」」「「「「「

と6人はハモって言った。そして死ぬほど驚いていた。

「魔界・・・なんで魔界・・・？」

魔魅は不思議で不思議でたまらなくて少し混乱。

「あなたたちが身に着けているその帽子、十字架、双剣、勾玉、被

り物、首飾り。

全部魔導具なんですよ！しかも伝説級！！」

とインフレが言い、

「だって、ケテルの魔帽子、コクマーの十字架、ネツアーの双剣、  
ビナーの勾玉、ティフェレトの魔冠、ホドの首飾り・・・  
全部「マジックパンプキン」の遺物です！！」

続けてデフレが言った。

「ケテル・・・王冠・・・？ですか？

それにコクマー・・・知恵？

そしてネツアー・・・勝利・・・。

ビナーで理解、ティフェレトで美、ホドで栄光・・・。」

と辰則がぶつぶつぶやいた。

「そうです！大正解です！えらいですね。」

それが各魔導具の意味ですよ。」

インフレはびっくりして言った。

「すげえなあ、お前。さすが靈道一族長男。」

雛子はさりげなく言った。

「あのお、マジックパンプキンってなんなんですかあ？おいしいですか？」

とまた訳のわからぬことを言う祈。

「>マジックパンプキン<というのは、魔界で最強！と言われてきた6人のチーム名です！

その人たちは魔界の悪の魔王「ベースダー」を洞窟の奥底に封印し、この6つの魔道具に

自分たちの魂を封印した・・・という言い伝えがありますです！」  
とデフレが答えた。

6人は混乱した。

ただ・・・ただハロウインを楽しもうとしたただけなのに着た瞬間魔界  
かなんかに飛ばされる、

伝説の魔導具を持っている、魔王を封印した6人・・・。



とにかく訳がわからなかった。

「あ！そろそろ時間がありませんねえ。

では、少し修行の間にも行ってもらいましょうか。」

とインフレがいきなり言い出した。

「え・・・？修行の間って何？」

魔魅は恐る恐る聞いてみた。

「魔界に行ったら、いろいろ危険なので戦闘も含めて

修行の間で練習してもらいます！」

とデフレがはつきり答えた。

「「「「「えーーーーー！！！！」「」「」「」

6人はビックリ。けど、少しワクワクする気持ちもあった。

「ではでは飛ばしますよー！みなさん準備してくださいね。」

とインフレが言い、二人で何かを唱え始めた。

「「神々の戦士たちよ 我の声に答え、彼らを導け

開け！修行の間！！」

スベル

呪文を言った後、後ろに謎の黒い穴が3つ現れ

6人はそれぞれペアずつ穴に吸い込まれていく。

そのとき何故かお金の音が聞こえた。

「だずげでー！！！！」

雛子が出すところでもない声。

「めんどくせえことになってきたな・・・まじで」

と狂助が言い、みんな吸い込まれていった。

「彼ら・・・とんでもない運命かもしれませんね！」

「そうかもしれないね！」

インフレ・デフレがつぶやいて、暗闇に消えていった。  
その顔には、闇が映っていた。

### 第三話：Halloween！（後書き）

さて、6人は修行の間という謎なところに飛ばされてしまいました。  
次はペアごとにお話がすすんでいきます。  
気になるペアの組み合わせは・・・？

#### 第四話：ペアで修行！その1

「いっつったああ！いきなり落されるとは……。って、にじどこ〜……。？」

辺りを見回しながら言う魔魅。

魔魅が見た場所は

遺跡の跡<sup>あと</sup>みたいなくずれた建物があったり・・・

食べてくれとささやいてそうな木の実がついている木々

「六甲のおい　い水」並に透き通った湖。

「わぁ・・・一応生きていけそうな感じ・・・かな？」

ふう・・・とため息をつく。

そして癖のように、ぼーっとし始めた。

今までの出来事を整理しているのだろう。

「・・・い・・・おい・・・」

「・・・」

魔魅は気づいていない。

「おい・・・おい！」

「ふぁ・・・？」

ぼーっとしてよくわかっていない。

「おい！ぼーっとするな！立て！」

「・・・！狂助え?!」

狂助が魔魅の前に立っていた。

「さっさと起きろ。」

どうやら俺ら二人だけみたいだぜ・・・ちっ、めんどくせえ。」

「えー！みんないないの?!本<sup>マジ</sup>気ですか・・・」

はぁ・・・と二人はため息をついた。

「お二人さん！そろそろ修行始めようよ！」

「ただでさえ時間ねえから。さっさとやるぜ？」

20代ほどの二人の男女。

女のほうはいかにも「魔法使い」な衣装

男のほうはどこみても「戦士」のような衣装。

キラキラと存在感を見せ付ける漆黒の黒髪女。

神々しいほど金色に輝く金髪男。

二人はとても仲よさそうに立っていた。

「あ！ちなみに私の名前はケイナ・マルソン。彼はネオン・リベック。  
ク。」

お二人さんの修行のお手伝いをしまゝす！」

「じゃあさっさといくぜ。お前はこっち。あんたはケイナについていきな。」

狂助はネオンに半強制的に連れて行かれる。

「ちよっ！俺たちに何すんだよ！！やめろ！！」

「安心しな。お前らに魔界で生き残ってもらうために修行するだけだ。」

魔魅は自らケイナに付いて行った。さすがのケイナも驚き、

「あなたは何故抵抗しないの？」

魔魅は即答。

「楽しそうだから！あと二人とも悪そうに見えないし。」

そして二人は分かれて修行をすることになった。

## 魔魅 side

「あ！私の名前は魔魅、桜 魔魅です！修行よろしく御願います  
！！」

魔魅の元気な声は辺りの建物に響いた。

「よろしくね！じゃあ修行はじめよつか！

まず・・・魔魅のジヨブ、職業は魔術師<sup>マジシャン</sup>ね。」

「ま・・・魔法使いですか？？」

わあ・・・面白そう！」

魔魅の顔は満面の笑顔。

「魔法使いじゃないわよ？魔術師<sup>マジシャン</sup>。」

魔術師と魔法使いは全然違うのよ。まずそれからはなそつか・・・

「

おねがいします！！！！」

魔魅の心はワクワクドキドキでいっぱいだった。

## 第五話：ペアで修行！その2

魔魅 side

「魔法使いは、ただ魔術書ブックを読んで魔術の魔力だけで呪文スベルを唱え、攻撃する人。

魔術師は魔術書マジシャンブックを記憶インプットして自らの魔力で呪文スベルを唱え、攻撃する人。この違いは分かる？」

魔魅は必死にメモをしているようだ。

ケイナの異界単語を獲物を捕まえる虎のように書いている。

「ああ、メモ書かなくても大丈夫。あとでどうせ全部知ることになるから。」

「そうなんですか！はあ……書いた意味が。。。」

魔魅は少しがっかりしたが、すぐ気を取り直し話しの続きを聞く体勢に入った。

「魔術師は魔術書マジシャンブックを見つけたら記憶インプットすればいいだけ。

魔法使いより簡単でしょ？ けど、少し欠点があるのよねえ。」

ケイナは、最初の頃が一番しんどい、と顔をしかめて言った。

魔魅はその顔を見て少し不安になった。

「その……欠点って何なんですか？」

ケイナは、はあ、とため息をつき、

「欠点はね、魔術書ブックを脳に直接、記憶インプットするから激しい頭痛がするの。最初は本気で痛いものよ。」

魔魅の顔は反射的に嫌がった。だがすぐに元に戻り、少し微笑んだ。

「痛いだけなんですよね？ なら大丈夫です！

私、痛いのは慣れてるんですよ！だから、修行始めてください！！」

「本当に？ いいの……？」

魔魅は大きく縦に首を振った。

「じゃあ、これが魔術書<sup>ブック</sup>。これを開いて。」  
ケイナは大きな紫色の本を差し出した。

狂助 side

「いつてえんだよ！いい加減離せ！！」

「まあまあそんなあせんって。これからお前さんを強くしてやるんだからさ？」

ネオン・リベックはへらへら顔をしながら手から離れた。

狂助はへらへら顔が嫌いみたいだ。しかし、狂助の態度は一気に変わった。

「本当に・・・強くしてくれんのか？俺に力をくれるのか？」

「強くしてやる！神に誓ってな。けどその前に質問。」

なぜそこまで力を求める？」

狂助の信念は相当強かった。それが目で伝わってくるぐらい。

「俺は、あいつら・・・いや、

あいつを守りたい！！そのための力がほしい。」

狂助の眼力はネオンをびびらせた。目が離れない。

見つめているうちに、狂助の目が真っ赤な血の色にかわっていった。

「あれ？お前の目の色・・・変わったぜ??

まさかお前・・・狂戦士<sup>バースカー</sup>か？」

ネオンはじろじろ狂助の目を見つめる。

「は？狂戦士<sup>バースカー</sup>ってなんだよ。俺はそんなの知らん。

俺、目が赤くなっただのは初めてだ。ていうか目、見るな！」



そう言っている間に狂助の目は普通に戻っていった。

ネオンはごほん！とわざとらしい咳をし、話す。

「<sup>バーサーカー</sup>狂戦士っていうのは

強く願ったり、思ったりすると目が赤くなつて

自分の体の限界以上の力が引き出せる能力。

別名＜<sup>ブラッディアイ</sup>血眼く＞。なかなかの珍種だぜ？

思う信念が強いほど効果も大きくなるし、すごいやつは

その力を使いこなすことができる。ちなみに俺もそのすごいやつ  
の1人！」

と言い、静かに目を閉じた。

そのときのネオンはさっきのへらへらネオンとは違う人のように思  
えた。

そして目を静かに開けた。目は真つ赤な血の色をしている。

「どうだ？これが俺の<sup>バーサーカー</sup>狂戦士バージョン。

この状態だと普通の人間の何百倍の力がだせる。

たとえば・・・あ！この岩とか」

ネオンは隣にあつた高さ70cm、直径30cmほどの岩を  
人差し指でちよん、と触れた。すると、一瞬で岩が粉碎。

跡形もなく。

「お前・・・今何した？」

狂助は目を疑った。ネオンはその顔をみて笑い、

「何って、岩に少し触れたただけだぜ？これが<sup>バーサーカー</sup>狂戦士の力。

俺はその力を神から授かった。力を持つことを許されたってこと  
だ。

お前も力を授かったんだろう？ならのその力、使いこなせ。  
使いこなさないと・・・お前は死ぬ。

てか俺の名前はお前じゃない、ネオンだ。ネオンって呼べよ。」

「どういうことだ・・・？俺が・・・死ぬ？？」

狂助の目は丸くなった。信じられない顔をしている。

「そうさ。使いこなさなかったらすぐ<sup>バーサーカー</sup>狂戦士になり、

何回もなっているうちに自分の意思が保てなくなる。そして最後には暴走する。

するとそこらの旅人に殺される。だから少ないんだ、狂戦士は。けど正しい力を身に付け、いい相棒に出会えたら

お前は良い狂戦士の使い手になれる。」

「相棒？？それはどういうことだ？」

「使いこなしても暴走することがあるのは当たり前。

それを理解して止めれる相棒が必要なんだ。

ちなみに俺の相棒はケイナさんだ。

「……よし！ちよっくら俺の過去の話しよう。」

ネオンは自信たっぷりの顔をしている。

狂助はそんな顔を見て

「なんでお前……ネオンの昔話なんて聞かないといけねえんだよ。それよりさつさと力を使いこなしてえんだ。」

ネオンは空を見た。真っ青な空が映し出されている。

そして狂助を見て、こう言った。

「俺は……狂助、お前のために話す。

罪の道へ行かぬように、俺と同じ道を歩まぬように。

ほんとは思いついたくもないけど、お前には言わないといけな気がする。

だから、聞いてくれ。」

## 第五話：ペアで修行！その2（後書き）

修行・・・まだ2人しか出ていませんがそのうち他4人も出します！  
ただこの二人の話が終わり次第・・・

次回！ネオンの過去が語られる！

## 第六話：ペアで修行！その3 回想

静かに風が流れた。少し肌寒く感じる。

ずっしりと重い空気の中、ネオンは語りだす。

「俺がまだ漢字が一つも書けないぐらいの時、誰かに両親殺されて親戚をうろろしてたんだ。

けどどこも良い感じのところが無くて、そのうちグレて行って、中学生の時にはもう一人暮らししてた。

学校でもつるんでる奴いないし、家でも誰一人いないし……  
・どこでも一人だった。

そんな俺でも双剣を持つてて、適当に振り回してたらはまっちゃってさ。

毎日剣の練習だけはしていた。そんなある日……」

く回想く

「なあ。お前ちよつと俺たちのためにジューズ買って来いよ」

いきなり俺に話しかけてきたのはいつもクラスでリーダー気取りしてる奴だった。

「おい聞いてんのか？ さつさと買って来いよ、五人分」

そう言つと周りからそいつの子分が4人出てきて、

「俺に逆らうつてんのか？ 俺の強さ知らないとか言わせへんぞ？

」

子分が笑い、そいつが俺の肩を押してくる。  
俺はもうその時限界だった。

「そろそろキレん」黙れ！！ お前に指図言われる筋合いねえんだよ！！」

俺は言い切ってしまった。そのときプチツと音が聞こえた気がした。  
「おいお前ら！！ やっちまえ！！！！」 「いえっさー！！」

四人は俺をボコボコにしようと向かってきたときに俺はやつらを半殺しにしていた。

そう、狂戦士<sup>バサカー</sup>になって暴走していたのだ。

「お・・・お前、狂戦士<sup>バサカー</sup>だったのか・・・？ やつやべえ・・・」

ひえ〜といいながらリーダーは逃げていく。

その時の俺は暴れに暴れまくってて、自分の意思で体が操れず自分が学校を壊していく様を見ていることしかできなかった。

逃げていく子供たち、いやな目で見るクラスメイト、先生の哀しい目。

そんな姿しか見ることができなかった。

そして俺は学校を出て（正確に言うところ入り口を壊して暴走して）街中まで被害は及んだ。

いつも持っていた双剣を振り回し、俺を殺そうとした旅人を次々に傷つけた。関係ない人たちも傷つけた。

俺はこのまま傷つけて傷つけて、最後に殺されて死ぬんだ・・・  
・・・と思っていたそのとき

「こらーっ！ 町ぶっ壊していいと思ってるの？！ みんなが許しても私は許しません！！」

町を壊すなら私を倒してからにしてちょうだい！」

一人の同年ぐらいの女の子が叫んできた。すごく勇気がある。その漆黒の黒髪は風を誘い、澄んだ青い目が俺を見ている。けど俺の体は気にせず町を壊していく。

「お前なんて無詠唱で十分だ！！ いけえ！ フレムガ！！」

女の子が手の平を俺に向けた瞬間、大きな焰ほのおの玉が飛んできた。なかなかの威力で、俺の背中に傷ができる。俺の身体はその少女の方を向き、突進した。

（やべえよ！ 止まれよ俺の身体あ！！）

それでも俺の身体は止まらない。

（もう・・・もう俺は・・・）

後一秒でまた女の子を傷つけてしまう。

（俺は、もう誰も傷つけたくねえんだよ！！ 止まれえええ！！！！）

俺の剣は女の子の肩の上ギリギリで止まった。

しかし、俺の意思が身体の暴走を一時的に止めている、という危険な状態だった。

女の子は手を伸ばし、俺に優しく抱きついてこう言った。

「もう悲しまなくていいよ。憎まなくていいよ。

もう、一人じゃないから。私が一緒にいてあげるから。

だから、泣かないで。ね？」



第六話：ペアで修行！その3（回想）（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

残念ながらこの作品を一時休載させて頂きます。

他の作品を書いていくつもりなのでそちらのほうもよろしく願います。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3657f/>

---

マジックパンプキン

2010年10月15日17時17分発行